

虹

に

これからも僕たちの店

①92 託されたバーは「架け橋」



店内で語り合う藤井さん(右)と生前のナイトさん(撮影・笠原大貴さん)

カクテルであれ、ウイスキーであれ、誰かと飲む酒はうまい。孤独にも寄り添う。バーは止まり木だ。しけた気分でも、晴れの日でも立ち寄れる。近所の人でも、よそ者でも構わない。いい街には、いい酒場がある。

たとえば射水市新湊地域。水面を夕日がなでる内川に沿って歩くと、青白いネオンサインが目飛び込む。「BAR」という三文字の光には清潔感も哀愁も漂う。店の名前は「ブリッジバー」。重々しい鉄の扉を開けば、日常からほんの少しだけ隔絶される。

薄暗い店内でバーテンダーの藤井宏析さん(28)がシェイカーを振る。看板カクテルは「内川ブルー」。亡きオーナー、スティーブン・ナイトさんが名付けた。テキーラベースの一杯は、爽やかな酸味が踊る。川面や空のイメージを青い色に重ねたように見えるが、少し違う。川沿いに係留された漁船の甲板を覆う青いFRPに触発されたい。ネーミングに茶目っ気のある人柄がにじむ。

「ブリッジバー」の店名にも由来がある。内川にはいくつもの橋が架かる。2人は「人や文化の架け橋になる店」を目指していた。店は形を変えた橋だった。

ナイトさんは1月、64歳でこの世を去った。「僕たちの店はどんな人でも気軽に立ち寄れる場所にしたい」。2人で始めたバーに込めたナイトさんの思いだった。藤井さんが遺志を引き継ぎ、カウンターに立つ。

東京はまぶしい。若者ならなおさらだ。藤井さんは愛知県蟹江町出身。名古屋も悪くないが、何をするにも東京だと思い込んでいた。高校卒業後に就職したのは、赤坂のイタリアンレストランだった。

店は外国人が多いエリアにあり、得意とは言えない英会話が求められた。ある日のランチタイム。慌ただしくフロアを駆け回っていると、白人男性が来店した。ナイトさんだった。ぎこちない英語で注文を取ろうとすると、流暢な日本語で応じてくれた。

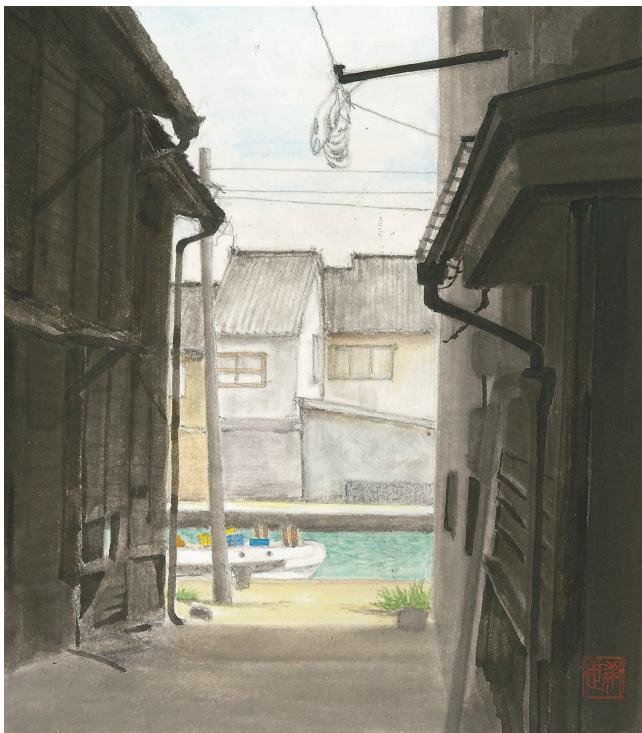
手が空いたタイミングで、藤井さんはナイトさんに雑談を持ちかけてみた。ナイトさんはアメリカ出身で、東京で暮らす翻訳者だという。藤井さんが英語への苦手意識を伝えると、「質問があればいつでも電話していいから」と名刺をくれた。当時19歳。藤井さんにとっては人生初の名刺だった。その言葉を素直に受け止めた。

英語で困った際に電話してみるとナイト

さんは快く教えてくれた。結局、お茶をすることになった。偶然にも2人の誕生日は同じで、好きな映画監督も一致した。上京したばかりの若者と、母国を離れて暮らすアメリカ人。心を許せる相手をお互い欲していたのかもしれない。年齢差や国籍の違いなどなきものごとく友人関係を築いた。

ワシントン州生まれのナイトさんは、小学生の頃に父親の故郷ハワイへ移り住んだ。日本の古典芸能に触れるため、同志社大学で2年間留学。帰国後は曲折を経て、ウェブメディア企業の日本支社長として東京に赴任した。その後も日本に滞在し、フリーランスで翻訳とコンサルティング業を請け負った。東京のバー通いを趣味としており、関心が高じて「いつかバーを経営してみたい」という思いを胸に抱いていた。

射水市に住む知人に誘われ富山を訪れた。内川越しに見える立山連峰の風景が、



「春陽」 広田郁世

雄大な山脈を望む故郷のワシントンとも重なった。都会と異なり、時間がゆっくりと流れている。「水辺の街で暮らすのもいいかも」と思った。築80年以上の手頃な古民家が見つかり、バーとして改築することを思い立った。しかし、バーをやるにはパートナーが必要だ。料理ができて、英語で接客できる人がいい。そう考えていた矢先に出会ったのが、藤井さんだった。

藤井さんにも転機が訪れていた。世話になった料理長が店を辞めると聞き、次のステップに迷っていた。そんな折に「富山でバーをやろう」とナイトさんから誘われた。富山がどこにあるかも知らないが、ゼロから店を作る機会はめったにない。「面白そう」という気持ちが勝った。バーテンダーの

経験はないが、調理の知識や技術は生かせる。2017年11月、2人は射水市に移住した。

効率だけ考えれば、工事が終わってから引っ越しただろう。しかし、ナイトさんは「ここで店をやるなら、まず住民として認めってもらうことが大事」と、地域になじむことを重視した。ナイトさんは翻訳の仕事を仮住まいで続けた。藤井さんは東京と富山を行き来し、銀座のバーでも修業した。富山にいる日は、内川近くのカフェでアルバイトした。こうして2人の顔は広まった。

開店間近になってナイトさんの体調に異変が生じた。肩の痛みに悩まされるようになった。「五十肩か、六十肩か」と冗談めかして病院へ行った。ところが、ステージ4の肺がんと診断された。若い藤井さんを不安定な状況に巻き込んだことへの負い目を感じつつも、治療のため東京の病院に入院した。

藤井さんは「僕がなんとかしますから」

と送り出したが、当時はまだ21歳。バーテンダー初心者であり、不安も大きかった。

2018年12月。店はオーナー不在の中、オープンした。当然苦労が絶えない。「あれできる?」と聞かれても、材料も知識も足りない。接客も行き届かない。それでも地域の人々は温かい。「おめでとう」「やっとできたね」と喜んでくれた。2人が1年間かけて、地域の暮らしの輪に加わってきたからだ。

体調が安定すると、ナイトさんもカウンターに立った。時間をかけて店を育てようとした。がらんとしていた本棚を、少しずつ写真集や文芸、美術関係の本で埋めた。自身が同性愛者であることをSNSで公言しており、本棚の一角にゲイカルチャー関連の本を置いた。セクシャルマイノリティー

の人にくつろいでもらうための、さりげないサインだった。「隠すわけでもないし、強調もしない。そういう自然な態度こそが、スティーブンさんだった」と藤井さんは振り返る。ノンアルコールカクテルを充実させたのも、やはり「誰にでも来てほしい」という思いからだ。

カウンターの左端がナイトさんの指定席だった。楽しい面持ちの客には冗談を言い、物思いに沈む客には敬意を払って見守った。夏の宵には粋な浴衣姿で現れた。

淡々としているようでも、時折死を意識した。「店を作ったのにがんになっちゃった」とこぼすこともあった。常連客が諭した。「がんになったけど、店があるんだよ」。ナイトさんは妙に納得した様子だった。

店がナイトさんの支えになった。店内を眺めては、「いい店だな」とつぶやいていた。年の離れた藤井さんをビジネスパートナーとして尊重した。率直に意見されると「それもそうか」と受け入れた。たびたび取材を受けたが、「僕の店」とは言わなかった。必ず「僕たちの店」と紹介した。しばらくして、経営権を藤井さんに移譲した。「エンディングノートも書いてるよ。藤井君に迷惑をかけたくないから」と言いながら。

いつもと同じような金曜日。ナイトさんは病院で倒れ、そのまま帰らぬ人となった。急性心筋梗塞だった。

藤井さんは取引先や家族に連絡するため、机の引き出しを開けた。エンディングノートが出てきた。白紙だった。「もう、嘘つきなんだから」と泣き笑いした。棺に入れて、「空の上で書いてください」と念を押した。

店はひと月ほど休み、再オープンした。もちろん藤井さんが切り盛りする。今ではすっかり手際が良くなった。カクテルメニューに「リソルジメント」という新作を加えた。イタリア語で「復活」「復興」を意味する。

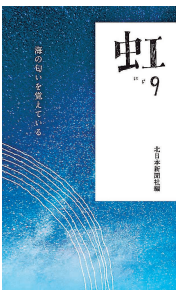
いつもの席にはナイトさんの眼鏡が飾られている。愛情を込めて育てた空間を今も見つめる。藤井さんはナイトさんに代わって「僕たちの店」と言う。窓明かりとネオンサインの光が内川の水面に溶け込む。

現代人にとって、バーは疲れた心を癒やす場所です。カウンターの向こうにいるバーテンダーは時に相談相手になってくれるでしょう。行きつけのバーがある人は幸せですね。「虹」は、2017年4月の第96回から今回まで田尻秀幸が執筆しました。今回で担当を離れます。引き続き「虹」をよろしくお願いします。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は5月1日(木)です。